



Title	Is Pynchon Too Much with the World? : "Is It O.K. to Be a Luddite?"と「ビン・ラディン」
Author(s)	石割, 隆喜
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2007, 31, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Is Pynchon Too Much with the World?

—“Is It O.K. to Be a Luddite?” と「ピン・ラディン」—

石 割 隆 喜

Thomas Pynchon のエッセイ “Is It O.K. to Be a Luddite?” を正面から論じた研究は少ないが、そうした中、Eberhard Alsen は、1950年代以降の現代アメリカ文学に見られる「ロマン派復興」の動きに注目した論文集 *The New Romanticism: A Collection of Critical Essays* にこの1984年発表のピンチョンのエッセイを再掲し、「ラッダイトやっていいかな？」を “romantic” (1) と見る視点を提供している。「理性の時代」には非合理主義的であるとして蔑称であった「ロマンス」が、その後否定も肯定も含めてどのような受容の歴史をたどったかを述べながら（アメリカ的「ロマンス」はこの形式が肯定的に受け止められた例とされる）、オールセンは “[t]he core of the romantic worldview” を “the attitude that life is an ineffable mystery, but that beyond the randomness of the physical world there may lie an ordered metaphysical world and a spiritual force that may be either beneficent or malevolent” だと説明し、ゆえにその “visions of life” は “pantheistic faith” から “Manichean doubt” (7) までをも含むと論じる。「ラッダイトやっていいかな？」におけるピンチョンの “the miraculous” の扱いがこうした “beyond” への信仰 (“a belief in transcendence” [Alsen 12]) を示しているとされ、これこそが、*The New Romanticism* の編者によりピンチョンのエッセイがロマン主義的と呼ばれる第一の理由である。加えて「ラッダイトやっていいかな？」は、Mary Shelley の *Frankenstein* を介して “the antitechnology and antiscience bias

of the early romantics” (Alsen 12) への共感を表明しているとされる（ピンチョンはエッセイの中で “the early romantics” の一人である Lord Byron に言及している）。たださらに補足する形でいえば、ピンチョンのエッセイは、オールセン自身が先の引用箇所でロマン主義的世界観の核と見なすマニ教的二元論をもその特徴として示しており、それはエッセイの末尾を飾るバイロンの詩の一節、“*And down with all kings but King Ludd!*” (Pynchon, “Is It O.K.” 41) における「打倒」という姿勢にもっとも顕著に現れている。そもそもマニ教的善悪二元論は Richard Chase によりアメリカ的「ロマンス」の特徴の一つとされているが (“the Manichaeic quality of New England Puritanism” [11]), 加えてピンチョンの作品を「マニ教的」と見る見方そのものが新しいものではない。Tony Tanner は70年代初めの時点で、50年代以降の小説家の特徴について、“contemporary American writers ... have made the tendency to begin to see the world in Manichaeic terms a recurrent motif in recent novels, Pynchon’s above all” (155) と指摘している。

だがタナーがこのように述べる際に依拠している Norbert Wiener の *The Human Use of Human Beings: Cybernetics and Society* には、次のような記述がある。“There is a subtle emotional Manichaeism implicit in all crusades, all jihads, and all wars of communism against the devil of capitalism” (260). われわれは、ウィーナーが非科学者の態度と見なすマニ教的善悪二元論が歴史上どのような具体的形をとって現れてきたかを述べたこの一節に、『人間機械論』が発表された1950年代の「赤狩り」の時代には他の何にもまして現実的なマニ教的問題と見なされていたであろう「資本主義という悪魔に対する共産主義の戦い」のみならず「ジハード」が含まれていることに、現時点で改めて注目せざるをえないと同時に、その意味をもう一度熟考することをも要請されているのではないか（そしてウィーナーが想定していなかったであろう意味における「十字軍」によってもまた、われわれはそうした再考へと促されている）。そもそも「マニ教的悪」とは「アウグスティヌスの悪」と対照的な概念である (“In Augustinianism, the black of the world is negative

and is the mere absence of white, while in Manichaeism, white and black belong to two opposed armies drawn up in line facing one another” [Wiener 260])。アウグスティヌスの悪とは「善の欠如」にほかならず、積極的な悪が実在するのではない（「わたしがその起源を探究していた悪というものは実体ではない」[聖アウグスティヌス 227])、したがって科学者にとって、“The view that nature reveals an entropic tendency is Augustinian, not Manichaean” (Wiener 259)。ピンチョンがロマン主義的であり、またマニ教的であるという主張は、彼の作品の中心的テーマの一つであるこの「エントロピー」に着目しても確かに首肯できるものである。科学者にとってエントロピーは無色透明な物理的“law”にすぎない（この「法則」にしたがうことが科学者の“faith”とされる [Wiener 263])。対して、オールセンの論文集に収められた、やはりピンチョンを「ロマンス」の視点から論じた論文での Arthur Mizener のキーワードを借りれば、ピンチョンにとってエントロピーは“metaphor” (82) であり、そこに彼は黙示録の終末観を重ねる（あるいは主観的に読み込む）。タナーも引用しているように、“The Augustinian position ... tends under the slightest perturbation to break down into a covert Manichaeism” (Wiener 260; Tanner 155) であるならば、いわば墮落した科学者であるがゆえにピンチョンは（どれほど科学に精通していようが）文学者であり、科学的「信仰」を奉じるアウグスティヌス主義者ではないがゆえにマニ教的ロマン主義者であるといえる。またこのことは、マニ教的性格を保持するピューリタニズムが宗教的「退化」（“backsliding” [11]）であるとするチェイスの議論とも合致する（いうまでもなく、若きアウグスティヌスはマニ教徒であったが、回心をへてキリスト者となった）。

このアウグスティヌス的なものからマニ教的なものへの（それ自体エントロピー的な）“backsliding,” “breaking down” を抜きに、ピンチョンをロマン主義的と呼ぶことはできない。“[T]he soldier of the Cross, or of the Hammer and Sickle” (259), “Any religious order which is based on the military model” (261), “[Russia’s] Berias and ... our McCarthys” (262), “totalitarian

countries,” “the fascist Queen” (263)——「十字軍」、「ジハード」、「共產主義」という言い方にとどまらず、ウィーナーは『人間機械論』において、科学的態度と相容れない、「悪」であり「敵」との積極的交戦を掲げるマニ教的態度の現実世界における具体的現れを、このように様々に言い換えては繰り返し読者の前に提示する。ピンチョンの「ラッドライトやっていいかな？」を「ロマン主義的」と呼ぶことは、彼の「ラッドライト」という概念が文学史的・文化史的ロマン主義だけではなく、こうした歴史上に現れた（そして現在も現れつづけている）善悪二元論に基づくマニ教的諸実践形式と如何なる形で共振しうるのかをも考慮に入れることでなければならない。やはりロマン主義を受け継ぐ者としてそのエッセイ “A World Too Much with Us” がオールセンの論文集に収められた Saul Bellow はそこで、やはり代表的ロマン主義者である William Wordsworth に言及しながら「世界があまりにも干渉してくる」（“the world is too much with us” [38]）といい、その防御策として個々人が “significant space” (38) を確保することの重要性を説く。ここでベローとピンチョンがともに「ロマン主義者」とされていること以上に注目されるのは、同じ「ロマン主義」でありながら、ベローのそれが “the soul” (Bellow 39) に至高の価値を見いだす求心的なものであるのに対し、ピンチョンの「ロマン主義」はそれとは逆に、ベローが斥けようとする “the world” へと向かう遠心性を備えていると見なせることである。どちらが真の「ロマン主義」かということが問題でないのはいうまでもなく、ここではただ、ピンチョンの「ラッドライトやっていいかな？」がベローの言い方を借りれば “too much with the world,” すなわち「あまりにも世界と関係しすぎている」可能性と、もしそうであるならばそのことの（後述する弁証法批評的）〈意味〉について、考えてみたいのである。

ピンチョンの「ラッドライト」という概念は、C. P. Snow の1959年の講演 “The Two Cultures and the Scientific Revolution” を受けてのものである。スノーはその講演で、「産業革命に理解を示さない文学的知識人は生まれながらのラッドライトである」と主張したのだが、ほかならぬ文学的知識人であ

るピンチョンは四半世紀後にこれを取り上げ、スノーによって汚名を着せられた「ラッドライト」という人種であり現象を再考してゆく。まずピンチョンは *The Oxford English Dictionary* にあたり、「ラッドライト」の語源が、イギリスのレスターシャーで1779年頃に2台の靴下編み機を破壊した Ned Lud という人物にあることを確認する。この人物は、ラッドライト運動が発生した1811年から1816年頃までには人間を超えた伝説的存在となり、“Captain Ludd”あるいは“King Lud”として神話化され、打ち壊しの首謀者たちが一様にその名で呼ばれることになる。ここでピンチョンは、ネッド・ラッドが1779年に破壊した靴下編み機が当時 “a new piece of technology” であったわけではなく、すでに200年近く存在していたものであったことに注意を促す。つまりピンチョンにいわせれば、ネッド・ラッドは “a technophobic crazy” などではなく、また彼の怒りも必ずしも機械そのものに向けられたものではなく、彼は何よりもまず “Badass” であり、彼の怒りもまた “the controlled, martial-arts type anger of the dedicated Badass” と理解されねばならないのである (“Is It O.K.” 40)。この「ワル」をピンチョンはシンプルに、“Big” で “Bad” だと定義する。レスターシャーのネッド・ラッドが30年を経て「キング・ラッド」へと神格化される頃には、彼は機械が真に意味するもの、すなわち資本の集中と失業という巨悪に立ち向かう「デカくてワルい」スーパーヒーローとして、カリスマ性を帯びるにいたるのである。“When times are hard, and we feel at the mercy of forces many times more powerful, don't we, in seeking some equalizer, turn, if only in imagination, in wish, to the Badass—the djinn, the golem, the hulk, the superhero—who will resist what otherwise would overwhelm us?” (“Is It O.K.” 40)。

このようにユニークな「ラッドライト」の再定義を行ったあと、次にピンチョンは「ラッドライト小説」と彼が呼ぶジャンルの系譜を探ってゆく。メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』において、行き過ぎたテクノロジーを手にし、神を気取る人間に対して復讐を試みる、身長2メートル40センチのクリーチャー、あるいは Horace Walpole のゴシック小説 *The Castle of Otranto*

の結末部でようやくその完全な姿を現し、自らの正当な後継者を告げて天に昇ってゆく Alfonso 公の巨大な亡霊などが、これら 2 作を「ラッドライト小説」たらしめている「ワル」とされる。加えて小説以外においても、King Kong が “your classic Luddite saint” という称号を与えられる (“Is It O.K.” 41)。これらは皆「ラッドライト」として、「機械の否定」という共通の特徴を備えているのだが、問題は、ヒロシマ以降の冷戦状況あるいは「核」に対抗できる “Big” で “Bad” なものを小説家、特に SF 作家がいまだ生み出せていないことだとピンチョンは指摘する。しかし、「コンピュータの時代」である現代において、「ラッドライト」たちはこのテクノロジーを打ち壊すのではなく逆にそれと手を結ぶことで、奇跡を起こすことが可能となるのではないか——ピンチョンはこう主張する。

このピンチョンの「ラッドライト」論をわれわれが20年後のいま読むことは、一つには、もはや次のような発言を見過ごすことができないということの意味するだろう。2001年9月11日の同時多発テロ後に、現代中東の専門家が新聞のインタビューに答えたものである。「79年のソ連軍のアフガン侵攻の時、米国はビンラディン氏らの活動を支援しました。育てた人物が米国を攻撃するようになった。ビンラディン氏は米国にとってフランケンシュタインです」(宮田「深層」)。宮田律は『現代イスラムの潮流』でもまったく同様の表現を用いている(「ビン・ラディンは、アメリカが育てた人物だが、その彼がアメリカを標的にするようになった。まさにアメリカにとって、ビン・ラディンは〔フランケンシュタイン〕となったのだ」[142]) のだが、注目しなければならないのは、この著作が同時多発テロ以前の2001年6月の出版であり、著者が9.11以前からこの「ビン・ラディン＝フランケンシュタイン」説を唱えていたことである。したがって、インタビュー中にある「米国を攻撃」という言葉も、9.11テロだけではなく例えばそれ以前の、1998年8月のケニアとタンザニアのアメリカ大使館爆破事件をも念頭に入れたものと考えるべきなのはいまでもない。

湾岸戦争を機に反米へと転じた Osama bin Laden を「フランケンシュタイ

ン」に譬えるこのレトリックに関してまず注意すべきことは、われわれは中東研究者であり英文学者ではない発言者の意図を汲んで、「フランケンシュタイン」を Victor Frankenstein の造り出した「モンスター」と読み替えねばならないということである。この一般的な誤解さえこちらの側で解いてしまえば、それ自体には異を唱える余地のないこのメタファーを前にわれわれが考えなければならない問題はきわめてシンプルである。すなわち、思い違いとはいえ物語の構図そのものには誤りのない集団的誤解に基づき、中東問題の専門家がビン・ラディンをフランケンシュタインのモンスターに譬えるということは、この一連のアメリカに対するテロの首謀者（彼は2004年の米大統領選直前に、同時多発テロを自らの犯行と認めた）は、ピンチョンのいう「ラッドライト」なのかということである。結論を先取りするなら、われわれはビン・ラディンをピンチョンのいう「ラッドライト」だと、「デカくてワルい」スーパーヒーローだと、考えていけない理由はないというほかはない。それが自動詞的に導き出された洞察であるなら、それを引き受け、むしろ積極的に、ビン・ラディンがピンチョンの「ラッドライト」で「あつていい」（“It is O.K.”）とする地点から出発の方がよいともいえるだろう。またこれは、ピンチョン自身が『Playboy 日本版』のインタビューで可能性を指摘しているように、ビン・ラディンが「実在しない」、「シンボル」的存在であったとしても同じことである（32）。「湾岸戦争を契機に…アメリカ軍がイスラムの聖地であるメッカやメジナのあるアラビア半島に駐留」（宮田『現代イスラム』142）するという事態が、アメリカの中東政策に対するアラブ世界には限らないムスリムの不満を土壌として、たとえ「テロリスト」の想像力の中だけであれ、ピンチョンのいう“When times are hard,” すなわち救世主の出現をさぐるように夢想するにまで追い込まれた絶望的な状況として都合良く「理解」され、それがまた、自らアメリカに対する「十字軍」（サイード 92）を率いるのだという「使命感」のようなものを生み出したとしても、その思考回路自体はわれわれに理解できないものではない（これが「理解」できる、「解釈」しようとさえいえなくなるような状況の方をこそサイードは危惧している [93-94]）。

「ラッドライトとしてのビン・ラディン」という、ピンチョンの読者の想像力の限界を試すかのようなこの2項の結び付きは、Molly Hite が *V., Gravity's Rainbow*, そして *Vineland* に関して “he is forcing understanding of and even empathy for conventionally inconceivable acts” (140) と指摘している通りのことが、「ラッドライトやっていいかな？」においても見られるというにすぎない。この2項の結合を促した触媒ともいえる「ビン・ラディンはフランケンシュタインである」というメタファーに関していえば、発言者本人にとっては気の利いた、上手い譬え以上のものではない、しかしピンチョンの読者にとってはそれ以上のものとならざるをえないこのような「わかりやすい」比喩など仮になかったとしても、中東のここ数十年の歴史を知ってさえいれば、われわれはいずれ9.11を初めとするアメリカに対するテロをピンチョンの「ラッドライト」の文脈で読み解かざるをえなかったであろうことは、疑いのないことだと思われる（Noam Chomsky が指摘するように、アメリカの中東政策が原因でアラブ世界に蓄積されてきた “a mass reservoir of sympathetic understanding for at least parts of their message, even among those who despise and fear them” [121] を「テロリスト」が巧みに利用し、彼らがそこから養分を得ている可能性に加え、メディアを通じて知らされたように、9.11テロに「途轍もなく歓喜」[“the prodigious jubilation” Baudrillard 4] する思考回路が現実存在したということ、ピンチョン流に言えば、あの “Big” で “Bad” な出来事を、ピンチョンのラッドライト論など知らなくとも、ピンチョン流「ラッドライト」的出来事そのものとして受け取る精神構造が存在したということは、否定できない）。こうしたことが問題となる所以は、アメリカを代表する作家が主張する一つのアイデアが、当のアメリカを攻撃する「テロリスト」の思想と共振・共鳴してしまうという逆説にある。しかしさらなる問題は、ピンチョンがエッセイの中で、「ラッドライト」と「アメリカ」を明示的にイコールで結んでいることである。核兵器の次にわれわれの前に立ちはだかる大きな問題は、人工知能、分子生物学、そしてロボット工学の三つの分野が一つに交わる時、すなわち人間が人間を人工的に造り出せるよう

になる時に、その姿を現すだろうとピンチョンは予言するのだが、彼は続けて、その時にどのような「ラッドライト」的「ワル」が立ち上がってくれるか非常に楽しみではあるが、そこまで長生きできないわれわれは、「アメリカ人として」(“as Americans”)、ロマン派詩人バイロンが歌ったように、“clear identification between the first Luddites and our own revolutionary origins” (“Is It O.K.” 41) にせめてもの慰めを得ようではないかと提案して、エッセイを閉じるのである。

ここまであからさまに「アメリカ」に投げかかるテキストが、アメリカにテロを仕掛ける側の論理と響き合ってしまうのである（もちろんここでの「アメリカ」とはピンチョンが表象する「アメリカ」であり、われわれの戦略は、それが抱える問題を明らかにするために、ひとまず彼の「アメリカ」を受け入れてみることにある）。ピンチョンをこのように読む、あるいはむしろピンチョンがこのように読めてしまうその「読み」とは、一体どのようなものなのかという根本的な問題に立ち返ってみるのも回り道ではあるまい。ピンチョンにおける「ラッドライト」と「アメリカ」の「意味」を再考すべき問題としてわれわれに突き返すこの「読み」を前に、二つの読みの理論がわれわれの導きの糸となってくれようと考えられる。Fredric Jameson は彼の「弁証法批評」(dialectical criticism) を次のように説明する。“Content is already concrete, in that it is essentially social and historical experience, and we may say of our own interpretive or hermeneutic work what the sculptor said of his stone, that it sufficed to remove all extraneous portions for the statue to appear, already latent in the marble block” (403-04). 読み手は、「解釈」と称して作品に意味を押し付ける必要はなく、彫刻家が大理石に対してするように作品から不要な部分を取り除き、すでに具体的な形を備えて取り出されるのを待っている〈意味〉を明らかにするだけでよい(V. に描かれる、象牙の中に完成品の形で「すでに」[“latent”] 埋まっている美しいチェスの駒や孫の手、透かし彫り入れ子細工のように [Pynchon, V. 30-31]). もう一つの理論は、J. Hillis Miller の「倫理的な読み」である。“Good reading means noncanonical

reading, that is, a willingness to recognize the unexpected, perhaps even the shocking or scandalous.... By a noncanonical reading ... I mean a response to the demand made by the words on the page..." (Miller 338). 読み手の "ethical obligation" (Miller 338) とは、作品が抱える予期せぬもの、ショッキングでスキャンダラスでさえあるものをじっと見据える、規範からの逸脱を厭わない読みを行うこと、ページ上の言葉の要求一つひとつに応答すること。興味深いことに、ミラーは異質で驚愕すべき要素を内に宿す作品を、ジェイムソンの大理石の中に眠る彫像を思わせる言い方で、図書館や書店、あるいはわれわれの書斎の書棚で眠る "unexploded time bombs ready to go off when there is the conjunction of the work and the good reader of that work" (339) と譬える（ここで脱構築とマルクス主義的弁証法批評が互いに接近していることは、Derrida 自身の *Specters of Marx*—— "this attempted radicalization of Marxism called deconstruction" [92]——を挙げるまでもなく驚くにはあたらぬ）。

われわれはピンチョンのエッセイを、ミラーの言い方を借りれば「その言葉の要求の通り」に読むことによって、ビン・ラディンが「ラッドライト」となってしまうのみならず、「アメリカ」性を色濃く帯びた彼のその概念自体が「アメリカ」そのものをいうなれば自壊に追い込む様（あるいは「ラッドライトやっていいかな？」という「時限爆弾」が爆発した様）を目撃したのだということができる。ただしミラー流の「倫理的な読み」にしたがうことで行き着いたこの逆説こそが、ジェイムソンの「反解釈」が取り出すことを目論むピンチョン流「ラッドライト」の "concrete content"（あるいはピンチョン自身のいう象牙の中に眠る「美しいチェスの駒」）であるというのであれば、その読みは十分に倫理的でも弁証法的でもないといわざるをえない。弁証法批評についてジェイムソンはさらに次のように説明する。 "[T]he process of criticism is not so much an interpretation of content as it is a revealing of it, a laying bare, a restoration of the original message, the original experience, beneath the distortions of the various kinds of censorship that have been at

work upon it” (404). 批評とは、作品に加えられた様々な検閲の結果生じた歪曲を取り払い、その「オリジナル・メッセージ」を回復し、開示すること。これは要するに、「オリジナル・メッセージ＝彫刻」に付着したエントロピーを減少させることにほかならないが、ここで注目されるのは、先の引用部分では材料となる大理石の削り落とされる余分な部分とされていたものが、「検閲による歪み」とさらに別の比喩で言い換えられていることである。つまり彫刻家とは、大理石の塊から「検閲」を取り払い、彫刻の「復元」作業を行う人間にほかならない。ピンチョンのエッセイにおける「アメリカ」は、この「検閲」あるいは「歪み」だと考えられるのではないか。「フランケンシュタインのモンスター」を vehicle としてしたがえる tenor「ビン・ラディン」は、そのメタファーを通じた「テロ」行為により、ピンチョンにおける「アメリカ」という“extraneous portions”を破碎し、除去することに貢献しており、このいわば「彫刻家としてのビン・ラディン」こそが、われわれが行き着いた逆説の（少なくとも半分の）正体なのではないか。

この「アメリカ」という「検閲」の働きは「ラッドライトやっぺいいいかな？」以外にまで及んでいると考えられる。同じ1984年に出版された短篇集 *Slow Learner* の序文でピンチョンは、モダニズムとビートという二つの選択肢からビートを選び、「消費」することで、結果的には“a sane and decent affirmation of what we all want to believe about American values” (Introduction 11) がどういうことか、より深く理解できるようになったと、自らの「アメリカ」性に自覚的に言及している。また2003年に出版された George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* 生誕百周年記念版に寄せた序文の中で、「英語」に関して次のように述べている。この『1984年』という小説が“The Principles of Newspeak”という学術論文めいたエッセイで終わっていることの理由はそこで使われている英語にあるのではないか、まるで「ニュースピーク」が過去のものであるかのように過去時制が使われている、そもそも「ニュースピーク」ではなく「オールドスピーク」すなわち標準的な英語が用いられている、これは英語が生き残ったということ、“the ancient humanistic ways of thinking inherent in standard

English” (Foreword xxiv) が勝利を収めたということではないか、すなわち物語自体の陰鬱な終わり方にもかかわらず、この小説自体のエンディングは希望が見いだせるものなのではないか。ここでピンチョンが見せる「英語」（とそれに内在するとされるヒューマニズム）に寄せる信頼には、たとえそれが「ニュースピーク」という極端に非人間的な言語との比較により生まれたものにせよ、彼が『スロー・ラーナー』の序文で見せた「アメリカ的価値観」に対する「肯定」的態度と通底するものがあることに疑問の余地はないだろう。この「内向きのピンチョン」が信頼を寄せる「アメリカ」は、“transnational”（あるいは“transatlantic” [243]）な比較的視座に立つことにより、「実像」と見えるアメリカの国家的アイデンティティが「虚像」（“virtual”な「アメリカ」）にすぎないことを暴くのがピンチョンの戦略であるとする Paul Giles の議論では説明しきれないものである。

ピンチョンの“the world”へと向かう遠心性が、「ラッダイトやっていいかな？」における「アメリカ」を批判的に再検討すべき問題として提示し直すとしても、それはピンチョンの「ラッダイト」そのものが無効になるということではなく、その「ラッダイト性」の「アメリカ」に限定されない核（ジェイムソンの“concrete content”すなわち「彫刻」、ピンチョンの「チェスの駒」）が新たに姿を現すということである。ピンチョンは“the first Luddite disturbances”の原因となった編み機の発明により2世紀以上にもわたって資本の集中と失業が“part of daily life”であったと述べたあと、こうしたことは“German philosopher”に限らず誰の目にも明らかであったという。これは明示的に名指されていないがいうまでもなく Marx であり、またピンチョンはラッダイト運動が“open-eyed class war”（“Is It O.K.” 40）であったとも指摘する。木原善彦は、「これだけの議論ならば、マルクス主義入門のような話である」（221）と述べるが、しかし問題は、マルクス自身はラッダイトの打ち壊しに批判的であった点である（“It took both time and experience before the workpeople learnt to distinguish between machinery and its employment by capital, and to direct their attacks, not against the material instruments of production, but

against the mode in which they are used” [Marx 429])。このような「階級闘争」のマルクスと重ね合わされた「ラッダイト」以上に「ラッダイト」的なのは（ピンチョンのマニ教的マルクスとは逆に、ウィーナーは “Marx’s own view was Augustinian” [261] と指摘している）、ピンチョン自身がエッセイの末尾で提示し、デリダ経由のマルクスとも響き合うラッダイト像ではないか。人工知能、分子生物学、ロボット工学の3分野が一つに交差するときに誕生するであろう「ラッダイト」的「ワル」を楽しみに待つピンチョンだが、彼は同時に、具体的に何が起こるかは “unpredictable” であり、また “even the biggest of brass ... are going to be caught flat-footed” とも述べる (“Is It O.K.” 41)。この予測不可能性あるいは「不意打ち」としての「ラッダイト」、*apparition* としての「ラッダイト」こそが、「ラッダイト」のエッセンスなのではないか（ピンチョンはネッド・ラッドを「武道家タイプのデカイワル」と「考えることにしている」[“I like to think”] と、いわばただ主観的な願望のみを述べているにすぎないことを忘れてはならない [“Is It O.K.” 40])。デリダの幽霊とは一言でいえば「怖い」もの (“*es spukt*, ‘it spooks’” [133])、そしてその戦慄により自己同一性の安逸を脱構築に導くものであるが、“apparition” をその語源に立ち戻って「現れるもの」と捉えるなら、それはハムレットの父王の亡霊や「共産主義という幽霊」と同様、突如出現する恐るべき他者としてラッダイト（その「出没」の証拠が “‘Lud must have been here’” [“Is It O.K.” 40] という人びとの言葉である）のみならず「テロリスト」の姿そのものなのである。

- * 本稿は、第49回日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム「現代アメリカ文学とソール・ベローの死」（2005年12月10日、於関西学院大学）における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

Works Cited

- Alsen, Eberhard, ed. *The New Romanticism: A Collection of Critical Essays*. New York: Garland, 2000.

- Baudrillard, Jean. *The Spirit of Terrorism and Other Essays*. Trans. Chris Turner. New ed. London: Verso, 2003.
- Bellow, Saul. "A World Too Much with Us." Alsen 31-40.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. 1957. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Chomsky, Noam. 9-11. [Expanded ed.] New York: Open Media-Seven Stories, 2002.
- Derrida, Jacques. *Specters of Marx: The State of the Debt, the Work of Mourning, and the New International*. Trans. Peggy Kamuf. New York: Routledge, 1994.
- Giles, Paul. *Virtual Americas: Transnational Fictions and the Transatlantic Imaginary*. Durham: Duke UP, 2002.
- Hite, Molly. "Feminist Theory and the Politics of *Vineland*." *The Vineland Papers: Critical Takes on Pynchon's Novel*. Ed. Geoffrey Green, Donald J. Greiner and Larry McCaffery. Normal: Dalkey Archive, 1994. 135-53.
- Jameson, Fredric. *Marxism and Form: Twentieth-Century Dialectical Theories of Literature*. 1971. Princeton: Princeton UP, 1974.
- Marx, Karl. *Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production*. Trans. Samuel Moore and Edward Aveling. Ed. Frederick Engels. Vol. 1. 1887. Moscow: Progress, 1965.
- Miller, J. Hillis. *Theory Now and Then*. Durham: Duke UP, 1991.
- Mizener, Arthur. "The New Romance." *Southern Review* 8 (1972): 106-17. Rpt. in Alsen 79-89.
- Pynchon, Thomas. Foreword. *Nineteen Eighty-Four*. By George Orwell. 1949. New York: Plume-Penguin, 2003. vii-xxvi.
- Introduction. *Slow Learner: Early Stories*. By Pynchon. 1984. London: Picador-Pan, 1985. 5-25.
- "Is It O.K. to Be a Luddite?" *New York Times Book Review* 28 Oct. 1984: 1+.
- *V*. 1963. New York: Bantam, 1964.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. London: Jonathan Cape, 1971.
- Wiener, Norbert. *The Human Use of Human Beings: Cybernetics and Society*. 1954. New York: Discus-Avon, 1967.
- 木原善彦『トマス・ピンチョン——無政府主義的奇跡の宇宙』京都大学学術出版会、2001.
- サイード、E. W.『戦争とプロパガンダ』中野真紀子・早尾貴紀共訳、みすず書房、2002.
- 聖アウグスティヌス『告白（上）』服部英次郎訳、岩波文庫、1976.
- ピンチョン、トマス。インタビュー『Playboy 日本版』2002年1月号、32.
- 宮田律『現代イスラムの潮流』集英社新書、2001.
- 「深層」『毎日新聞』（大阪本社版）2001年10月6日朝刊、27面。